

新編
國語讀本
尋常小學校
兒童用
卷八



図書 和図書 遡



福岡教育大学蔵書

小山左文二合著
武島又次郎

新編 國語讀本 尋常小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 卷八目次

第一課	わが國體	一
第二課	櫻井驛ノユイゴン	四
第三課	郵便	九
第四課	大阪よりのでんばー	十二
第五課	あきなひ	十七
第六課	動物ノ世界(一)	二十一
第七課	動物の世界(二)	二十四
第八課	海の底	二十八
第九課	わが國の歴史(一)	三十二
第十課	わが國の歴史(二)	三十八
第十一課	子ヲモツテ知ル親ノオン	四十三
第十二課	妙冲	四十五

第十三課	ココロエチガヒノオヤ	四十九
第十四課	藝くらべ	五十二
第十五課	藝くらべ	五十五
第十六課	金銀銅鐵	五十九
第十七課	貨幣と紙幣	六十三
第十八課	日本銀行	六十七
第十九課	貯金のことを問ひ合す	六十九
第二十課	汽船の旅	七十四
第二十一課	汽車中ノ日記	七十八
第二十二課	世界	八十二
第二十三課	今の日本	八十六
第二十四課	今の日本	八十八
第二十五課	しよーぎの盤	九十二

體

新編 國語讀本 尋常小學 校兒童用 卷八

第一課 わが國體

昔、天照大神は御孫ににぎの尊に、「とよあしはらのみづほの國は、わが子孫のながく君たるべき地なり。なんぢ、ゆきく治めよ。共皇位は、天地と共に、きはまりなかるべし」と仰せられて、三種の神器を授けたまひ、この國にのぞましめたまへり。

召



その後、神武天皇
の犬和の^{カシハラ}檀原に都を
さだめたまひて、はじ
めて、御國のもとゐを
ひらかせたまひしも、
ひとへに、大神の御
思召にしたがひ奉ら
れしなり。御代々の

血

天皇の、かならず、御血すぢの御方々より立
たせらるるも、同じく、大神の御思召にし
たがひ奉らるるなり。

孝般

かく祖先をたふとぶ國風は、上と下との
別ちなく、一般に行はれ、孝となり、忠となり
て、一國の内、和らぎ親しむこと、あたかも一
家のごとし。

かかる國體なれば、御代々の 天皇は、深

愛

く民を愛して、子のごとくにしたまひ、人民も、またよく心を一にして、天皇に仕へ奉り、君のため、國のために、命をすつるをほまれとせり。

永

我等は、かかるめでたき國體を永遠にたもちて、ますます國の光を世界にかがやかさざるべからず。

驛

第二課

櫻井驛ノユイゴン

卿

楠木正成卿ハ、後醍醐天皇ノオホセヲカウムリテ、北條氏ヲホロボシタリシガ、程ナク、足利尊氏ハ、天皇ニソムキタテマツルニアヒテ、マタ、コレヲウチタリ。

尊氏ハ、一タン、マケテ九州ヘニゲタレドモ、フタタビ、大軍ヲヒキキテ、セメ上レリ。

正成卿ハ、コレヲ防ガンガタメ、攝津ノ湊川ニ向ヒタルガ、小軍ナレバ、戦ヒノ勝チガ

族

死



タキヲ知り、子正行卿^{マサツラ}
ヲ櫻井驛ニヨビヨセ
テ、ワレ、コノタビハ、ウ
チ死スベシ。ワレ死ナ
バ、尊氏カナラズ、天
皇ヲナヤマシ奉ルベ
シ。汝、ヨロシク、生キノ
コリタル一族郎ドー

首

ドモヲアツメ、ハヤク賊ヲホロボシテ、
天皇ノ大御心ヲ安ンジ奉ルベシ。コノ御刀
ハ、カシコクモ、天皇ヨリタマハリタルモ
ノナリ。今、汝ニユヅリオカン。コレニテ、尊氏
ノ首ヲ切レ。トユイゴンシテ、正行卿ヲ河内
ヘカヘシタリ。

正成卿ハ、湊川ニテウチ死シタルノチ、十
年バカリヲ經テ、正行卿ハ、兵ヲオコシ、賊ト

四條^{シヨウナテ}畷ニ戦ヒテ、イサギヨクウチ死シタリ。
父子心ヲ一ツニシテ、天皇ニ忠義ヲツ
クシタテマツリシハ、マコトニ萬世ノカガ
ミトイフベシ。

レンシュ―第一

攝津ノ國ナル湊川神社ハ、世ニ名高キ楠木正成卿
ヲマツレル所ニシテ、河内ノ國ナル四條畷神社ハ、
ソノ子正行卿ヲマツレル所ナリ。

郵 封

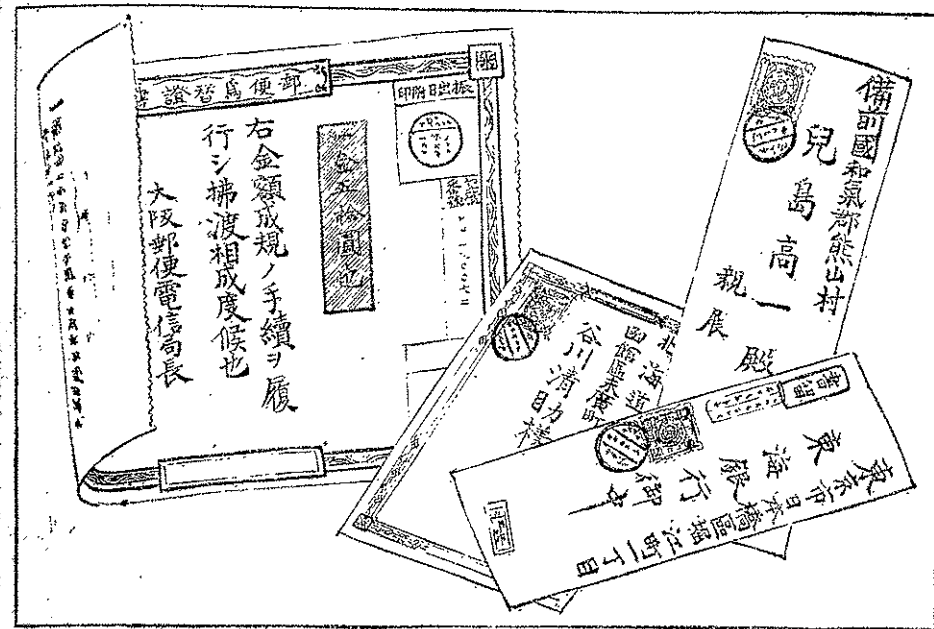
第三課 郵便

郵便で出す手紙には、封書とはがきがあ
る。封書は、目方四匁までは、三錢の郵便切手
をばればよいが、それより目方が増せばし
たがつて、切手も増さなければならん。

扱 法 留 料

又、大切な手紙を取り扱ふ法がある。それ
を書留郵便といふ。書留にすれば、手数料が
七錢かかるが、そのかはり、郵便物のなくな

筒 往



るきづかひはない。
はがきは一枚が壹
錢五厘である。これは
別に紙も封筒もいら
ず、しごくべんりであ
るから、ちよつとした
用事はなるだけ、はが
きですますがよい。往

復

復はがきには、返事の分までついてゐる。

近頃私製はがきといふものが出来た。そ
れにはきれいな紙などがかいてある。

また封緘^{フイカン}はがきといふのがある。それは、
一枚三錢である。封が出来て、その上紙も封
筒もいらぬゆゑ、大に便利である。

新聞や、ざつしや、その他、書物・道具なども、
郵便で送ることが出来る。

送

爲替

また、金も、郵便で送ることが出来る。それを郵便爲替といふ。爲替に出す金は、一度に五十圓以下とかぎられてゐる。

第四課 大阪よりのでんぽー

おつやの父は、仕入れのために大阪に行きたり。もはや、歸るべき頃ならんと、おつやもおつやの母も、まち居たるに、父より電報來れり。何事かとおどろきながら、急ぎて開

報

き見れば、「カネタラヌ五。スグオクレハラ」とありたり。

おつやは、母の側にて讀みたれど、分らぬよーすなれば、母は、「仕入れの金が足らぬゆゑ、五拾圓、すぐ送れ。原正造よりとのことなり。」と教へたり。されど、何ゆゑに、かかる書き方をするかは、まだ分らぬよーすなり。

よつて、母は、また「電報にては、かな十五字

點

五〇二

かなと同様なれば、この文は、ちよーど、一音
信なり。」と教へたり。

かくて、おつやは、母に代りて、爲替をくみ
つぎの手紙とともに、書留郵便にて、父のも
とに出だしたり。

もはや、お歸りの頃と思つて居ましたところ、に、電報がまゐりましたので、何事かと驚きましたが、お金のことで、まづ、安心

驚

いたしました。ただ今、爲替で、五拾圓を送り申しました。

母様は、お忙しいから、爲替も私が出しました。この手紙も、私が書いて、母様に見てもらったのであります。

九月二十五日

つや

父上様

また、おつやは、つぎの返電をうちたり。

五。カハセニテイマダシタツヤ

第五課 あきなひ

すべて、品物を仕入れることと、仕入れた品物を賣り渡すことを、あきなひといふ。

商ひをする人を、あきんどとも、しよーに仲んともいふ。商人には、問屋商、仲買商、小賣商の三種がある。

問屋商は、品物を大口に買ひ入れて、また、

卸

大口に、他の商人に賣り渡すものである。その大口に賣り渡すことを、おろしうりといふ。通常は、ただ卸しといつて居る。

仲買商とは、商人と商人の間に立つて、品物を取り次ぎ、口錢をとつて、世渡りをするものをいふ。

捌込

小賣商は、問屋や仲買商から、大口に品物を買ひ込んで、多少にかかはらず、賣り捌く

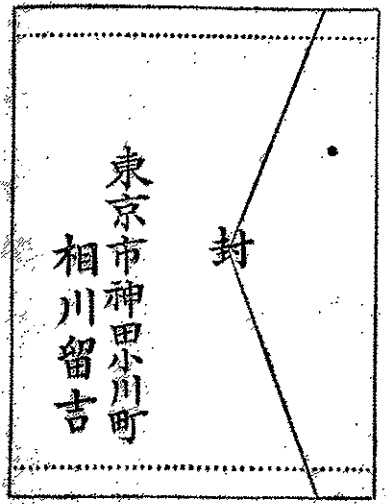
相

ものである。小賣商には、店で賣るものと、諸處を持ちあるいて賣るものとの二とほりある。

すべて、商人は、多くの人を相手にするものであるゆゑ、とりわけ、人の信用をえなければならぬ。人の信用を得るには、正直でなくてはならぬ。それゆゑ、商人に一番大切なのは、正直といふことである。

れんしゅー 第二

大阪市中島二町目
増田永助殿



郵便にて出す手紙には、封書と
はがきとあり。
爲替證書を入れたる封書など
は、書留郵便にて送るをよしとす。
はがきには、つーれいのはがきの
外に、往復はがきと、封緘はがきと
あり。封緘はがきは、封も出来、その
上、紙も封筒もいらぬゆゑ、はな
はだ、便利なるものなり。

第六課

動物ノ世界(一)

稲ノカリアトニ、タクサンノ雀が來テ居
ルノハ、何ヲスルノデアラウカ。

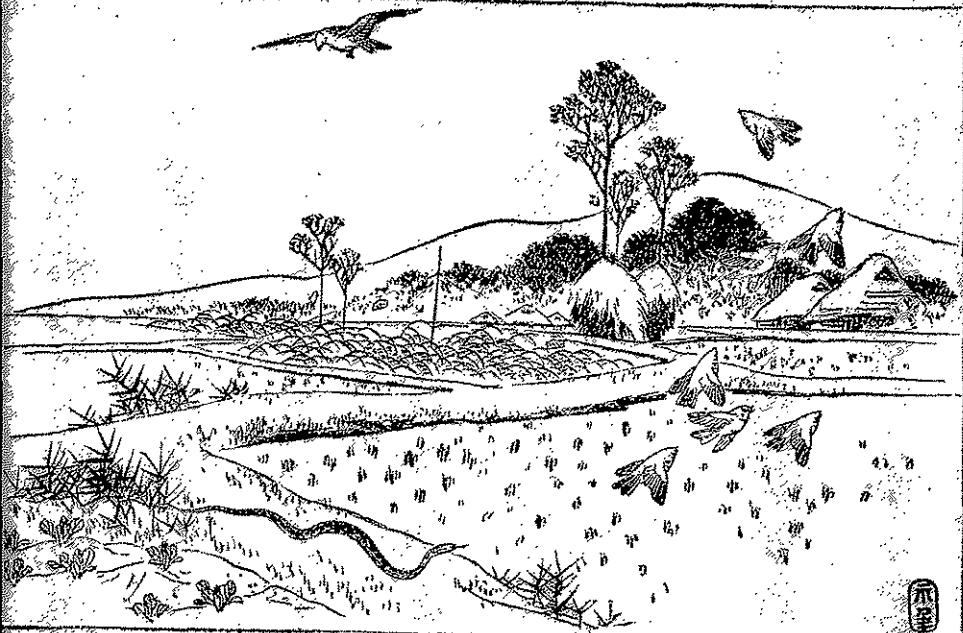
アレハ、稲株ニカクレテ居ル虫ヲサガシ
テ食フノデアル。

ソレハ、虫ニ荒ラサレタ稲ノカタキヲ取
ツテクレルノデアラウカ。

イイエ、雀ハ、虫が大ソー好きデアルエエ。

株 荒

姿散



ジブンが食フタメデ
アル。

アレ、雀が何ニ驚イ
タカ、一ドニ、パットニ
ゲ散ッタ。ソレハ、アノ
アゼニ、ヘビノ姿が見
エタカラデアル。
オヤ、ヘビガ、マタ、ア

逃

ワテテ、畑ノ方ヘニゲ出シタ。ソレハ、高イ空
ニ、トビガマウテ居ルノヲ見テ、見付ケラレ
テハ、命ガナイト思ッタカラデアル。
イツノ間ニカ、ヘビガ、見エナクナッタ。オ
ホカタ、畑ノフチノ小サイ穴ニ、逃ゲ込ンダ
ノデアラウ。

穴ハ、ヘビノ家デアル。ヘビハ、ゴノ家ニ冬
ゴモリヲシテ、春ニナルト、マタ、穴カラ出テ、

小鳥や、カハヅヤ、ネズミナドヲ取ルノデア
ル。アア、ナント、オソロシイ動物世界デハナ
イカ。

第七課 動物ノ世界 (二)

鳴
ジノ鳴ク聲デアル。

キジハ、何ヲ食フノデアラウカ、カハヅヤ、

恐
トハ、實ニ、恐ロシイデハナイカ。

ヘビノ類ナドヲ食フノデアル。ヘビヲ食フ
山ニ居ルケダモノデ、一番カハエラシイ
ノハ、ウサギデアル。

奇妙

真

ウサギニツイテ、奇妙ナコトガアル。ソレ
ハ、ウサギノ毛色が、フダンハ、茶色デアルガ、
冬ニナルト、真白ニナツテ、雪ノ中ニ居テモ、
アマリ目立たナイコトデアル。ウサギガ、外

ノ強イモノニ食ハレ
ルコトが少ナイノハ、
マツタク、コノタメデ
アル。

キツネヤ、夕ヌキモ
目立タヌ毛色デハア
ルガ、マダ心配デナラ
ヌユエ、晝ハ穴ニカク

レテ居ル。

ソノ外、イモムシハ青ク、イナゴハ、稻ノ葉
ノヨ一ニ、シヤクトリ虫ハ、枯枝ノヨ一ニ見
エルノハ、ミナ見ツケラレナイタメデアル。
ナント、奇妙デハナイカ。

虫デモ鳥デモ、目ニ立タヌヨ一ニ、體ノ色
 が出來テ居ルガ、ソレデモ、弱イモノハ、ヤハ
 リ、ワシ・シシト・ラナドノヨ一ナ強イモノニ、

取ラレルノデアル。

カウイフ争ヒハ、陸ノ動物バカリニアル
ノデハナイ。海ヤ川ノ魚ナドノ中ニモ、行ハ
レテ居ル。

才互ニ「取ラウ、取ラレマイ」トシテ居ル動
物世界ヲ見レバ、實ニ、ユダンノナラヌ世界
デハナイカ。

第八課 海の底

ああ、おもしろや海の底、
海の底なるおもしろき
世界にすめるは、何物ぞ。
魚の仲間や貝仲間。

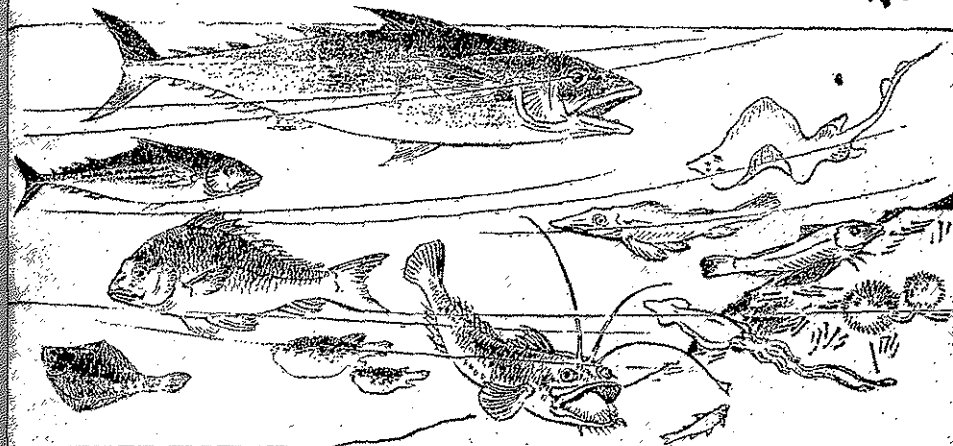
同類多きはあぢやさば、
いわしや、せぐらたらにしん。
太くて短きまんぼーや、
細くて長きたちのうを。」

短



柔

腹



骨柔かきあかえひや、

赤きほーぼー！かながしら。

わが身をまもるうにのはり、

敵をくりますすいかの墨。」

口を開けるあんこーより、

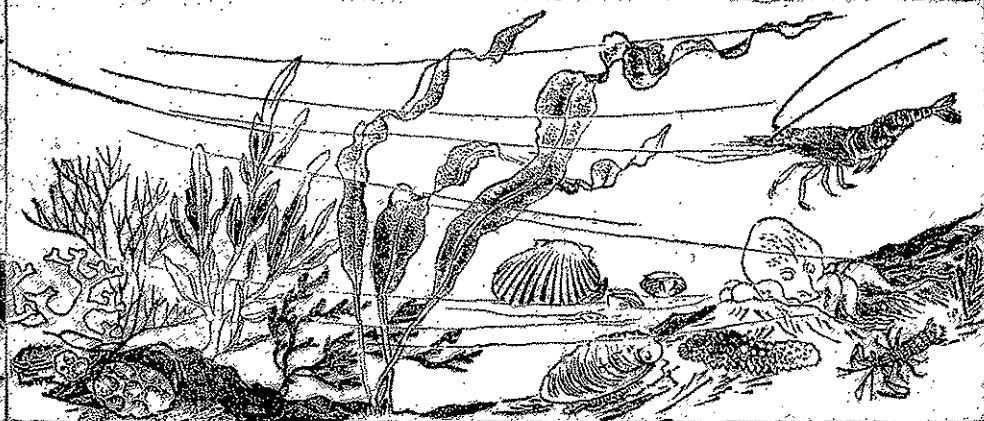
にくきは、腹の太きふぐ。

さては、味よきたひ・ひらめ、

夏はかつをに、冬まぐろ。」

岩

似



その外えび・たこ・しゃこ・なまこ、

あはび・はまぐり・ほたてかひ、

浅き深きもすきずきに、

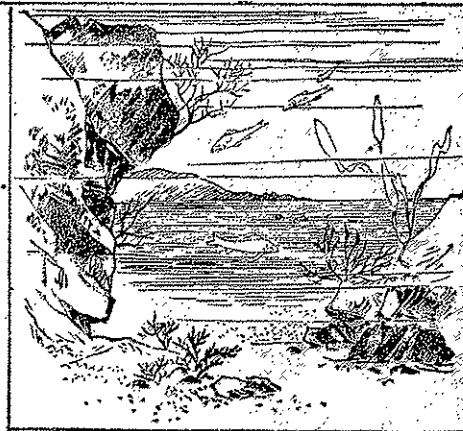
すみかをわかつどろと岩。」

岩に生えたる海草は、

こんぶ・あらめや、ほんだわら、

海松・さんごは、木の如く、

石に似たるは、きくめ石。」



石あり土あり砂ありて、
陸にかはらぬ海の底。
山や平地や谷ありて、
陸にかはらぬ海の底。

れんしゅー第三

多くの魚類貝類などを養ひて、人に見する所を、すい
どくくわんといふ。すいどくくわんにゆき、きれいな
たひのれつをなして泳げる様、大なる赤えひの水
の中をひらひらと上下する姿、さざえ・はまぐり
あはびなどの、岩のまはり、海藻の間などにむれをる

有様を見れば、實に、海の底を旅行する思ひあり。

歴史

第九課 わが國の歴史(一)

わが國は、神代より、引きつづきたる國に
して、神武天皇が御位につかせ給ひし後
にても、すでに、二千五百餘年の久しき年月
を経たるなり。

紀元六百年の頃、崇神^{スサノ}天皇は、農業をす
すめ給ひ、又、四方の人民をなつけ給はんと

改政號



兄皇子は藤原鎌足とは
かりて、蘇我入鹿をほろ
ぼし給ひき。孝徳天皇
の御時始めて、年號を大
化とたて、大に政治を改めたまひき。これみ
な、中大兄皇子が行ひたまひたるなり。皇子
はすなはち、天智天皇なり。
その後、元明天皇は、都を奈良にうつし、



これより、七代七十五年
の間、ここに都し給ひき。
紀元千四百年の頃、
桓武天皇は、都を平安城

定

に定め給ひき。これ、今の京都なり。

職

奈良朝の後、およそ三百年の間、藤原氏の
一族のみ、重き職にありて、そのいきほひは
なはだ盛なりしかば、この時代を、藤原氏の

の時代ともいふ。

第十課 わが國の歴史(二)

衰
紀元千七百年の頃より、藤原氏の勢衰へて、源平二氏、やうやく、強くなりたり。



平氏にて、もつとも、勢の盛なりしは、清盛なり。清盛の死したる後、源頼朝、つひに、平氏をほろぼ

任

して、征夷大將軍に任ぜられ、幕府を鎌倉に開きて、政をとりき。これより、明治の前まで、ほとんど七百年の間を、武家の世といふ。

紀元千九百年の頃、蒙古の大軍來りあだ

破



す。北條時宗、防ぎ戦ひて、大に、これを破りき。後、數十年を経て、鎌倉幕府の執權北條氏、わがまま甚

甚

しくなりたれば、後醍醐天皇は楠木正成、
新田義貞ニッタクヨシサダに命じて、これを討たしめ給ひき。
鎌倉幕府は政をとること、およそ百七十年
亡にして亡びたり。

間もなく、足利尊氏をむきて、北朝を立て、
つひに、征夷大將軍となりき。その子孫、天下
の政をとること十三代、およそ二百年、その
間、天下、大に亂れ、戦争たゆることなかりき。



中にも、戦争の、もつとも
多かりしは、およそ、三十
年の間なり。これを戦國
の世といふ。

織田信長、豊臣秀吉、相

つぎて戦亂をしづめ、秀吉は、朝鮮をもせい
ばつしたり。

豊臣氏は、三代、およそ、二十年ばかりにし

滅て、徳川氏に滅されき。

徳川氏は、幕府を江戸に開き、家康より十
五代二百七十年の間、天下を治めき。

辭 慶喜^{ヨシノブ}將軍の職を辭してより、天皇御親
ら政を行はせ給ふ。これを御一新^{ゴイチシン}といふ。こ
れより、國の光、ますます、世界にかがやけり。

レンシュー 第四

昔、ワガ國ノ人ハ、農ヲ主ナル職業トシタリシガ、佛教ノ
傳ハリシ後、工藝モ、マダ、ヤウヤク、盛ニナレリ。

奈良朝の後、およそ、三百年の間は、藤原氏が政をとつて、
その勢が、大に盛でありました。それゆゑ、この時代を、
また、藤原氏の時代ともいひます。

第十一課 子ヲモツテ知ル親ノオン

オノレハ、ツヅレヲマトフトモ、子ニハ、ウ
ツクシキ衣服ヲ著セント思フハ、親ナリ。オ
ノレハ、ヒヤ飯ヲ食フトモ、子ニハ、暖キ飯ヲ
食ハセント思フハ、親ナリ。オノレハ、一生、骨
働身ヲクダキテ働クトモ、子ニハ、安々ト、世ヲ

讓 渡ルダケノ身代ヲ讓ラント思フハ親ナリ。

オノレハ病ニウチフストモ、子ノ無事ナ

愚 ランコトヲイノルハ親ナリ。オノレハ愚ナ

賢 リトワラハルトモ、子ヲ賢シトホメラレタ

ク思フハ親ナリ。

カク親ハ、アリガタキモノナレドモ、イト

ケナキ間ハ、ソノアリガタサノホドヲ知ラ

ズ。知リタリト思フホドノアリガタサハ、實

成 ハ、ソノ萬分ノ一ナルノミ。汝等、成長シテ、ワ

育 ガ子ヲ育ツルトキニ至ラバ、ハジメテ、親ノ

アリガタサヲ、十分ニ知ルコトアルベシ。ユ

恩 エニ、子ヲモツテ知ル親ノ恩トイヘルコト

ワザアリ。

第十三課 妙冲

妙冲は、たちばなのはやなりといふ人の
むすめで、生れつき、孝行ものでありました。

罪

泣

役

看

悲

はやなりが罪によつて、伊豆の國になが
されましたとき、妙沖は泣いて父のあとを
おっかけました。

おめつけの役人は、妙沖のついて来るの
を見て、しかりましたゆゑ、妙沖は人目にか
からぬよゝに、晝はかくれ、夜はあるいて、遠
江の國までまゐりました。

はやなりは、ここで、病氣にかかりました。



妙沖は、夜もねずに看
病しましたが、そのか
ひもなく、はやなりは
とーとー、やどやで死
んでしまひました。

妙沖は、悲しくてな
りませんが、しかし、泣
いてばかりも居られ

墓

ませんゆゑ、父の死がいをはうむつて、墓のそばに、小さい家をたて、あまになつて、墓もりをして居ました。

かうして居る中に、天皇様は、はやなりの罪をゆるされました。妙沖は、大に喜んで、京都にかへつて、ねんごろに、父をあらためはうむりました。

れんしゅー 第五

妙沖は、たればなのはやなりの女なり。

はやなりが、罪によりて、伊豆に流されたる時、妙沖は父のあとをおひゆきたり。

父の死にたる後、妙沖は、墓のそばに、小さき家をたて、あまとなりて、墓もりをなしぬたり。

後、天皇は、はやなりの罪をゆるされたれば、妙沖は、大に喜び、京都にかへりて、父をあらためはうむりたり。

第十三課

ココロエチガヒノオヤ

アルトコロニ、イケバナ・チヤノユ・コトナ
ドノヨクデキルムスメガアリマシタ。
ソノオヤハ、ワガムスメホドノカシコイ

モノハアルマイト、タイソー、ジマンヲシテ
牛マシタ。

アルセンセイが、ソノウチニトマラレマ
シテ、オヤタチニ、「ソレホドニ、オムスメゴヲ
オシタテナサルクラキデアリマスナラ、サ
ダメテ、アンマノオケイコモ、オサセナサレ
タデアリマセウ。」トタヅネラレマシタ。

オヤタチハ、「ムットシテ、」ワタクシカタハ、
ムスメニアンマヲサセルホド、ビンボーシ
テハヲリマセン。」トコタヘマシタ。

センセイハ、「ゴレハ、トシダシツレイヲマ
ウシマシタ。シカシ、オムスメゴが、ヨメイリ
ヲナサレテカラ、ソノシウトタチノゴビヨ
ーキノトキ、チャノエヤ、イケバナデハ、ゴカ
イホーガデキマスマイ。カタヲモンダリ、ア
シヲサスツタリスルコトハ、ムスメノウチ

カラ、ヨクナラハシテオクノガ、オヤノツト
メデハアリマセンカ。トマウサレマシタ。
オヤタチハ、コレヲキイテ、カホヲアカメ
テ、ウツムイテシマツタトイフコトデアリ
マス。

第十四課 藝くらべ(一)

むかし、上手なゑかきと、上手な大工があ
つて、大工をひだのたくみといひ、ゑかきを
くだらの川成といった。

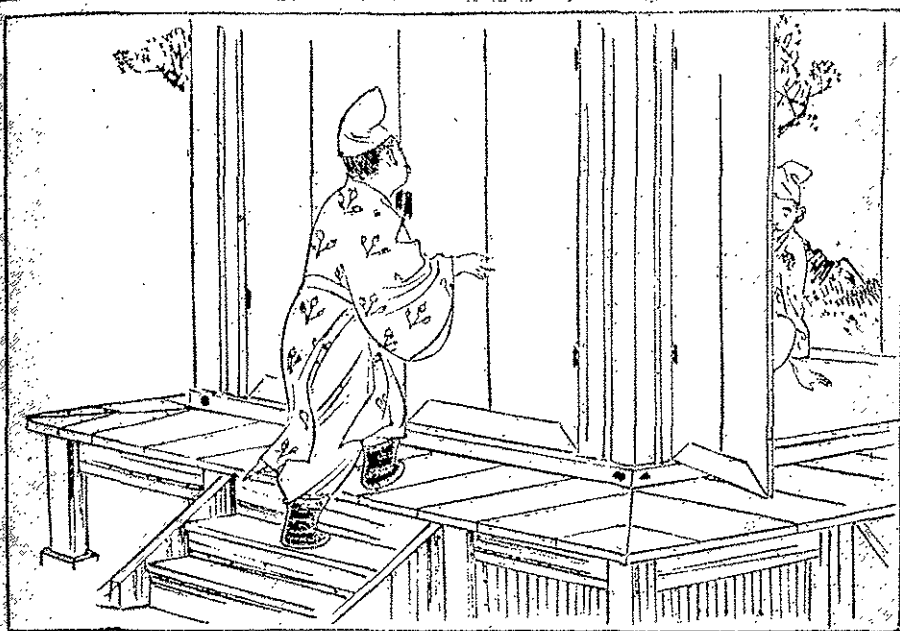
あるとき、たくみは、川成に向つて、「わが家
に、一間四面のどーをたてたゆゑ、見に来て
下さい。また、その壁に、何ぞよいゑをかいて
下さい。」といった。

川成は、これを承知していつて見た。とこ
ろが、四方をあけ拂つた堂の中にたくみが
居て、「さあさあこちらへ。」といふから、川成は、

堂 拂

壁 面

廻



えんに上つて、南の戸から入らうとした。すると、その戸がはたとふさがつた。

そこで川成は、西の戸口に廻つて、入らうとした。すると、また、その戸がふさがつて、南

の戸がひらいた。

それから、川成は、北から入らうとしても、東から入らうとしても、みな向つたところの戸がふさがつて、向はぬところの戸が開くので、とーとー、堂の中に入ることができずに、歸つてしまった。

第十五課 藝くらべ (二)

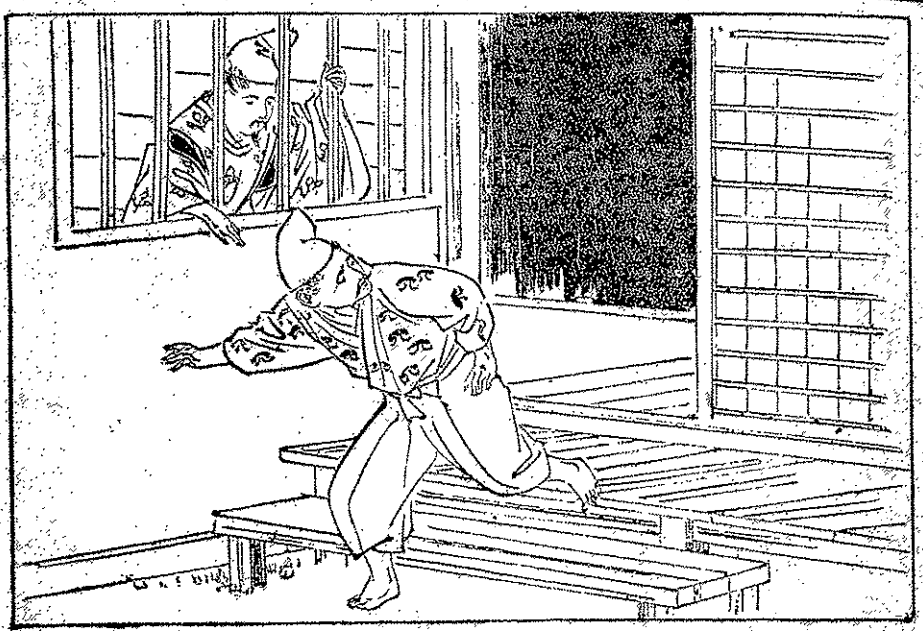
川成は大それたくみの藝に感心したか

ら、自分も、なにか、一つ上手なゑをかいて、たくみを驚かしてやりたいものであると、工夫をこらした。

いよいよ、ゑが出来たゆゑ、たくみの方へ、「お目にかけたい繪があるから、見に来て下さい。」といつてやつた。

たくみは、「じぶんが、もし、いったなら、きつと、さきごろのしかつしをせられるであらう。」

且



うと思つたから、一旦、ことわりをいってやつたが、あまり、来い、来いと、しひられるのである日、川成をおとづれた。

川成は、「たくみさん、よく来て下さつた。さ

あお上り。」といふから、たくみは何心なく、戸をあけた。

鼻
すると内には、太った人がしんでゐるよ
―で、そのにほひといったら、鼻持ちもなら
ぬほどであつたので、たくみは、思はず、「や」と、
聲を立ててにげだした。

川成は、「からから」と笑ひながら、出で来て、
「何ともないから、お上りなさい。」といった。た
くみは、おそるおそる、ちかよつて見た。そこ
ろが、それは、ふすまの繪であつた。

れんしゅー 第六

昔ひだのたくみと、くだらの川成が、藝くらべをした。
始めには、たくみがふしぎなこしらへかたの堂をた
てて、川成を驚かした。

後には、川成がほんとのものと見まちがふよ―な
上手な繪をかくて、たくみを驚かした。

この二人のすぐれたわざは、今も、人の話にのこつ
て居る。

第十六課

金・銀・銅・鐵

必屬

必要ナル金屬多シトイヘドモ、ソノ中、コト

ニ大切ナルモノハ、金・銀・銅・鐵ノ四ツナリ。

貴

金・銀ハ、金屬ノ中ニテ、モットモ貴キモノ

美

ナリ。金・銀ノ貴バルルハ、ソノ色、美シクシテ、

他ノ金屬ノ如クニサビヲ生ゼズ、マタ、クワ

ヘイ、アルヒハ、上等ナルカザリ物ナドヲ造

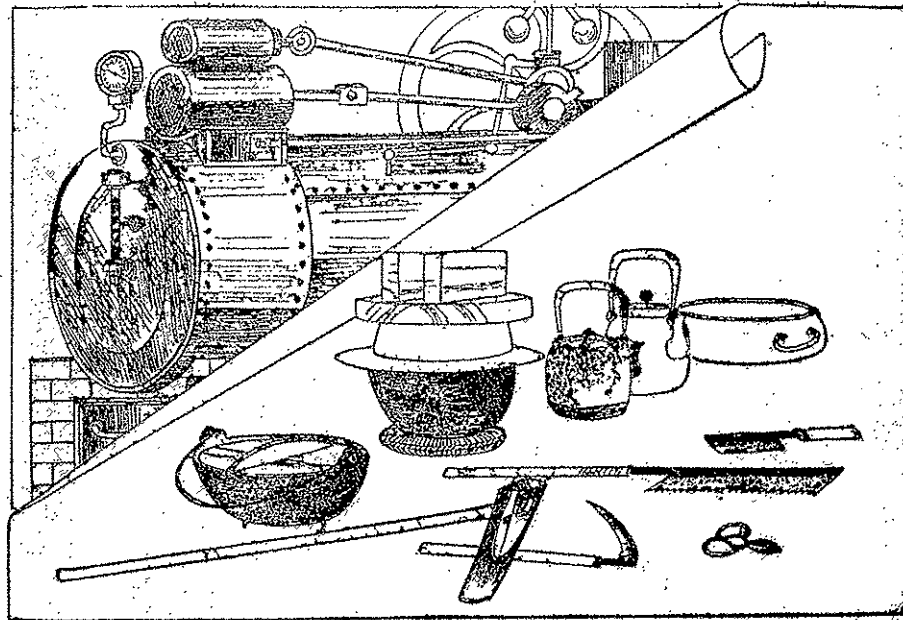
適

ルニ適スルガユエナリ。

サレド、實用ノ、モットモ、廣キモノハ、金・銀

鍋釜瓶

銃機械



ニアラズシテ、銅・鐵ナ

リ。銅・鐵ハ、鍋・釜・鐵瓶・ヤ

クヰン等ノ勝手道具

トナリテ、廣ク使用セ

ラルルノミナラズ、刀

劍・銃・砲等ノ武器トナ

リ、蒸氣機械アルヒハ、

工業用ノ機械器具ト

ナリ、マタ、農業用具トナルナド、一々、アグル
ニイトマアラズ。ユエニ、世ノ中が開クレバ
開クルホド、金・銀・銅・鐵ノ使用ハ、マスマス、廣
マルナリ。

質 堅

金・銀・銅ハ、質柔ニシテ、キズツキヤスシ。ユ
エニ、ソノ質ノ堅キヲ要スル器具ヲ造ルニ
ハ、他ノ金屬ヲマジヘテ、堅クスルナリ。金・銀
ニハ、大テイ、銅ヲマジヘ、銅ニハ、トタン・鉛・ス
ズナドヲマジフ。

鉛

貨 幣

第十七課 貨幣と紙幣

昔、貨幣の通用がなかつたころは、ある品
の入用な時には、他の品を持って行きまし
て、その入用の品をもつてをる人と、とりか
へごとをしたのであります。が貨幣が出來
てからは、こんな不便がなくなりました。

貨幣には、金貨・銀貨・白銅貨・青銅貨等の種

類があります。金貨には、五圓・十圓・二十圓の三とほりあつて、銀貨にも、十錢・二十錢・五十錢の三とほりあります。白銅貨は、五錢だけで、青銅貨は、五厘・一錢の二通りであります。その外、五錢の銀貨や、一厘・二錢の銅貨や、明治以前からの貨幣などがあります。これらも、通用はするけれども、新にこしらへることはありません。

換



紙幣は、貨幣の代りに用ゐるものであります。ゆゑ、何時でも、日本銀行に持つて行けば、貨幣と引き換へてくれます。

紙幣は、目方がかるくて、取り扱ひに便利

であるゆゑ、たくさんの金銭の受け渡しには、多くこれを用ゐます。
紙幣には、一圓・五圓・十圓・五十圓・百圓の五
とほりあります。

れんしゅー第七

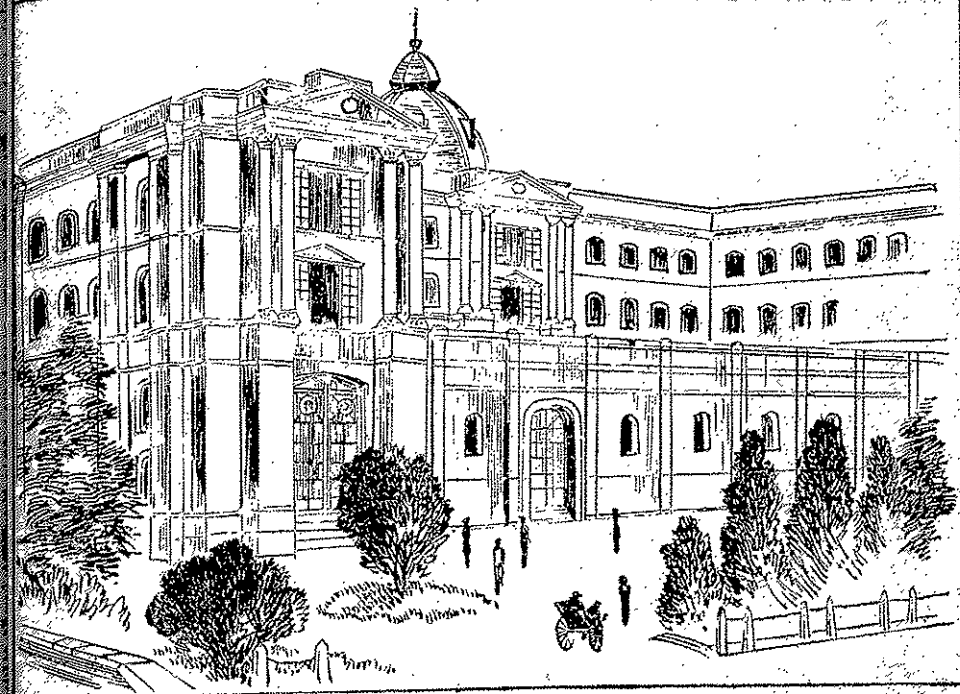
金屬は大ていこーざんからほり出す。金屬は、始めは、おほかた、外のものともまざつて、岩の形になつて居る。これに、さまざまの手數を加へなければ、貨幣や、日用品を造るよーな金屬とはならない。

第十八課 日本銀行

世間には、餘分に金を持てる人あり。また、
資本の不足なるがために、商業も、工業も、思
ふよーに出来ぬ人あり。

その餘分なる金をあづかりて、その人に
與
利子を與へ、これを資本の足らぬ人に貸し
て、やや、たかき利子を取らば、利子と利子と
の差によりて、利益を得べし。かかる業をな

發



す所を銀行といふ。
日本銀行は、東京
にありて、わが國の
銀行の中にて、もつ
とも、大なるものな
り。この銀行にては、
右の業をなす外に、
紙幣を發行す。

貯 預

日本銀行の外にも、數多の銀行ありて、處
處に、支店、代理店などを設けたれば、ゐなか
にても、あづけ金などをなすことを得べし。

第十九課 貯金のことを問ひ合す。

この頃、友だちが、銀行へ金を預けたさう
であります。金を預けるのは、まことによ
いことと思ひますが、私は、自分で金をま
うけることも出来ません。また、別に、手に

入る金もありません。

承れば、あなたも貯金なさるさうであります。が、どういふことをして、お金を得られまするか。出来ることなら、私も、これから、あなたのよゝに、預けたいと思つて居ります。ゆゑ、あまりたち入ったお尋ねではありません。が、貯金に出すお金を得る方法を教へて下さい。

尋

返事

拜

お手紙を拜見しました。私が貯金します。お金は、手習した紙を大切にしまつておいて、それを、母様からもらつて賣つたり、筆や墨を買ふとき、つりに取つた五厘や壹錢を、やはり、母様から貰つたりなどして、それをためておいて、拾錢以上になると、預けるのであります。

貴

利子は、まことに、少しであります。が、こんなにして、二年ばかりに、參圓ほどの貯金が出来て、その利子がもう、貳參拾錢になりました。

これを、自分で持つて居ては、壹厘もふえませんが、その上、手もとにありますと、自然何かを買ひたくなるものでありますから、預けてしまふがよろしうございます。

然

あなたも、今から、少しづつなりとも、貯金なされてはいかがでありますか。

レンシュー 第八

餘分ニ金ヲ持テル人ハ、コレヲワガ家ニ貯ヘズシテ、銀行ニ預クベシ。カクスレバ、ワヅカナル利子モ、次第ニツモリテ、後ニ至ラバ、大金トナルベシ。

銀行ハ、人ノアリ餘レル金ヲ預リ、コレヲ資本ノ不足ナル人ニ貸シツクルコトヲ業トスルトコロナリ。

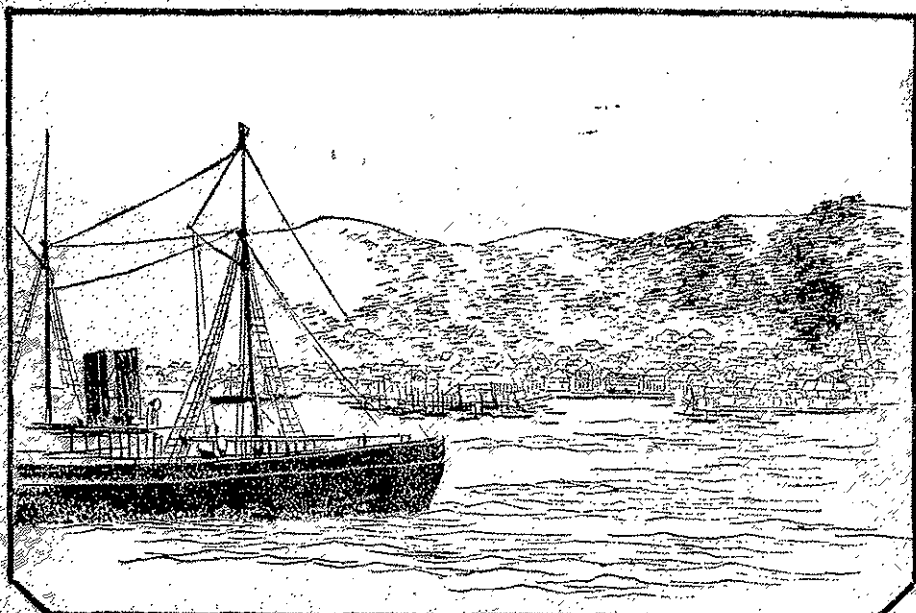
乗

第二十課 汽船の旅



豊前の門司を船出して、
乗り行く海は瀬戸の内。
なみをけたてて進みつつ、
著きしはあきの広島市。
ここは日清戦争中、
大本營のありし地よ。
その近邊にて名高きは、

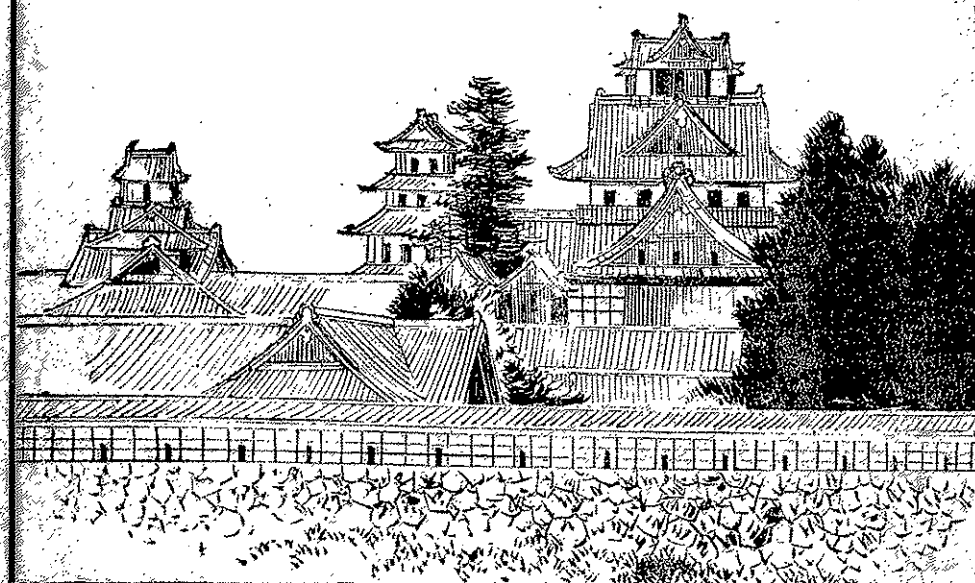
浦



呉軍港や嚴島。
島々浦々ながめつつ、
著きしは備後の尾の道港。
ここにしばらく船とめて、
また乗り出でて進みゆく、
船の旅行ぞおもしろき。
景色のよきはこのあたり、
大島小島のあちこちに、

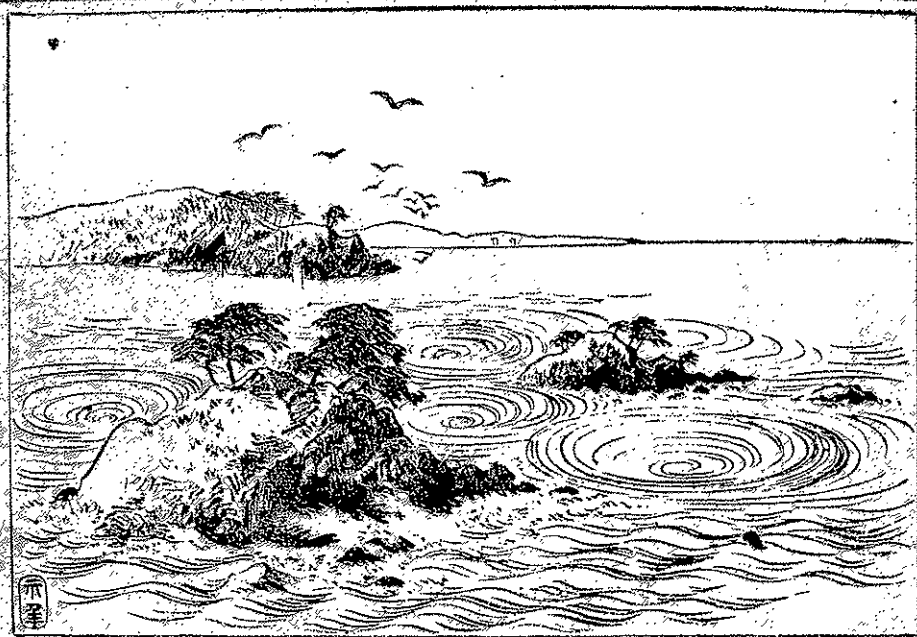
隠

湖起



見え隠れするそのさまは、
繪にもかきたく思ふなり。
風も起らず波立たず、
湖水をわたる心地して、
立ちよる處は四國なる、
讃岐の多度津や高松港。
ここを出づれば播磨灘、
右に見ゆるは淡路島。

狭



阿波の山々かすかなり。
淡路と阿波との間には、
海水つねにうづ巻きて、
名も鳴りわたる鳴門あり。
鳴門のせとを右に見て、
淡路播磨の間なる、
狭き海にと進み入る。
左の岸をながむれば、

殘

第二十一課

汽車中ノ日記



播磨の明石や舞子の濱。
濱邊の白砂青松に、
心殘して、東の方、
攝津の國に名も高き、
神戸港に著きにけり。

帳雄記

道雄ハ昨日、神戸ヨリ、急行ノ汽車ニテ上
京シヌ。今、道雄ガ、汽車中ニテ記シタル手帳

午

ヲ見ルニ、左ノ如シ。

神戸ヲ發セシハ、午前六時ナリキ。ソレヨ
リ五十分ニシテ、大阪ニ著ク。大和ノ奈良ニ
エカンガタメ、ココニテ乗り換ヘタル人、少
ナカラズ。

過

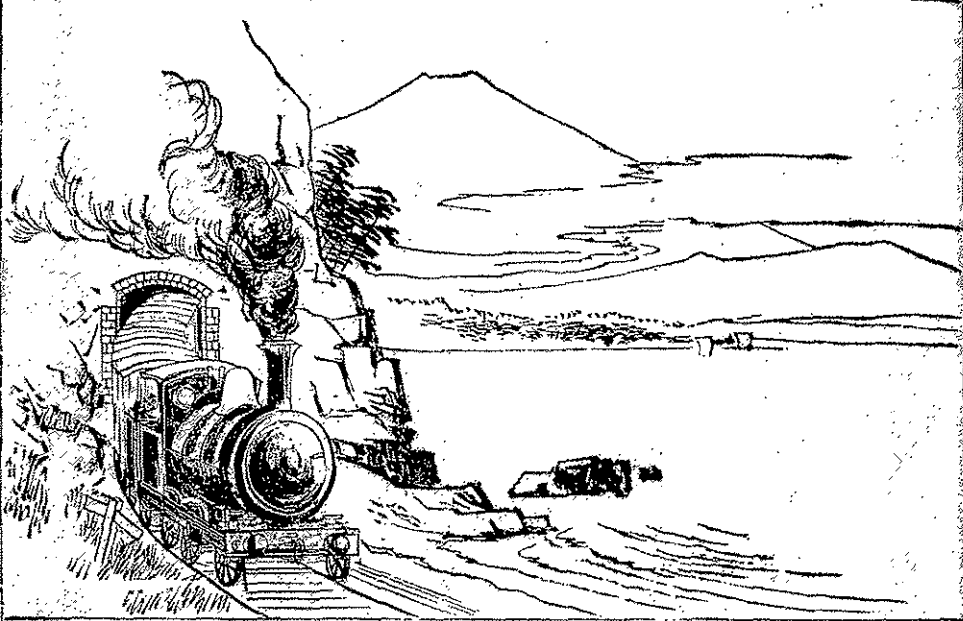
大阪ヨリ京都ニ入り、程ナク、近江ニ出デ、
琵琶湖ノ景色ヲナガメツツ、草津・彦根ヲ過
ギ、米原ニ著ク。草津ヨリ分ルル關西線アリ。

米原ヨリ分ルル北陸線アリ。

米原ヨリ美濃ニ入りテ、名高キ古戰場ナル關原ヲ見、大垣岐阜ヲ經テ、尾張ノ名古屋ニ著ク。名古屋城高クソビエテ、金ノシヤチホコノ日ニカガヤケルヲ見レバ、昔、大名ノアリシ世ノサマ、オモヒヤラル。時ハ正午ヲ過ギタレバ、ココニテ、晝飯ヲ食シヌ。

ソレヨリ、三河ノ豊橋遠江ノ濱松駿河ノ

眺



静岡ヲ經テ、三保ノ松原、田子ノ浦ナド、海岸ノ景色ヲ右方ニ眺メ、富士ノタカネノ夕景色ヲ左方ニ見、日暮レテノチ箱根ニカカリ、數多ノトンネルヲ過ギテ、相模ノ國ニ入ル。

大船^{オホフナ}驛ニテ乗り換へタル人多キハ、鎌倉^{ヨコ}横須賀^{スガ}ヲ見物センガタメナラン。

汽車ハ進ミテ、武藏^{ムサシ}ノ程^{ホド}ヶ谷^{ガヤ}ニ著ク。ココヨリ、横濱ニユク線路アレドモ、コノ汽車ハ、タダチニ進ミテ、東京ノ新橋停車場ニツキタリ。トキニ、午後十一時ゴロナリキ。

第二十二課 世界

世界の陸地は、大きく別けると六つにな

洲^{シュ}。すなはち、アジア洲・アフリカ洲・ヨーロッパ洲・北アメリカ洲・南アメリカ洲・オセアニア洲である。

わが國や支那や朝鮮は、いづれも、あじや洲の中にふくまれて居る。これらの諸國を、すべて、東洋諸國とも呼ぶ。

皆^{みな}さんは西洋の國々とか、西洋人とかいふことを聞いてゐませう。その西洋といふ

抵髮

のは、どこであらうか。

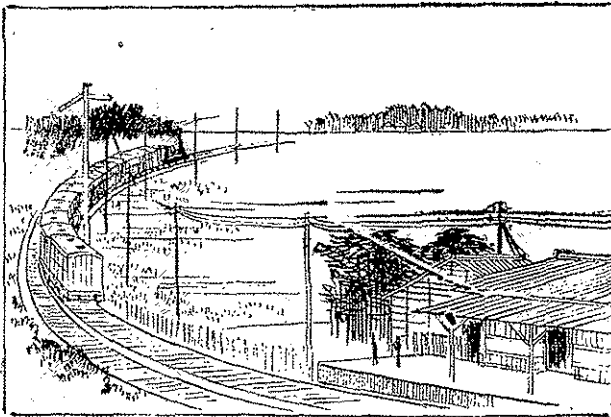
それは、ヨーロッパや、アメリカ洲をさすのである。西洋の人は、大抵、色が白くて、髪が赤い。

西洋で、おもなる國は、イギリス・フランス・ドイツ・ロシア・アメリカ・合衆國である。

右の五國は、いづれも、大をー開けた國である。また、大をー強い國である。よつて、わが

國と、これ等の五國とをあはせて、世界の六大強國といふ。

レンシューー 第九



ココハ、村ノ停車場ナリ。汽車ハイマ、黒烟ヲ立テテ走り行ケリ。車ノ數ノ多キヲ見テ、乘リ居ル人ノアマタナルコトヲ知ルベシ。

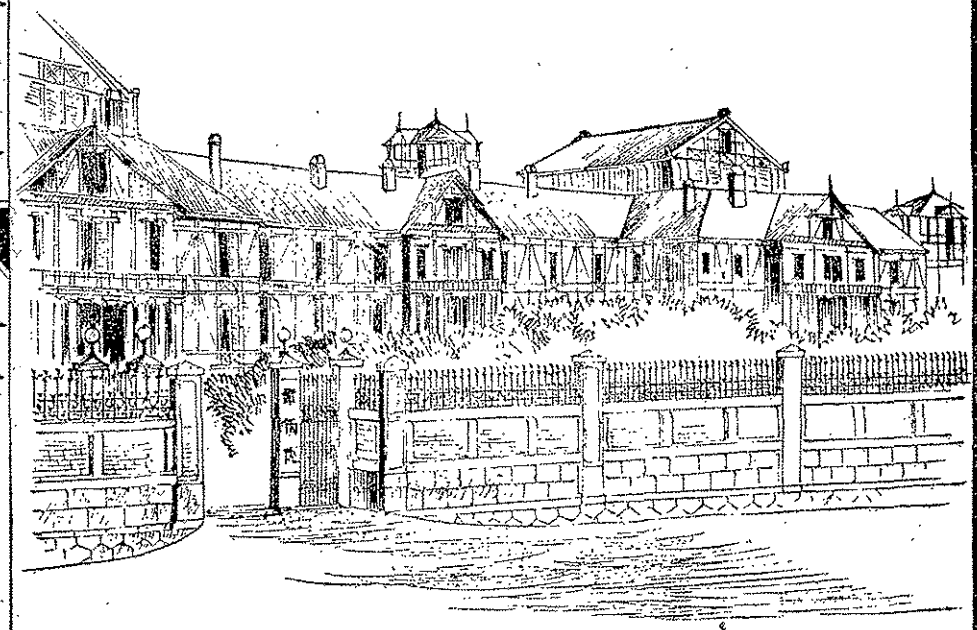
汽車ハ、ゴノ停車場ニトドマリシカ。イナ、急行ノ汽車ナレバ、ゴコニトドマラズシテ、過ギ行キタリ。

第二十三課 今ノ日本 (一)

議 會 談

今ノ日本ハ、昔ノ日本ト同ジカラズ。昔ハ、^{チヨリ}朝廷アルヒハ、幕府ニテ、スベテノ政ヲナシ
タレドモ、今ハ、帝國議會アリテ、人民モ、政ノ
相談ニアヅカルナリ。
昔ハ、大臣ヲアグルニハ、家ガラノモノニ
限リシガ、今ハ、少シモ、家ガラニカカハルコ
トナシ。

郡 府



昔ハ、國々ニ、定リ
タル大名ナドアリ
シガ、今ハ、府縣ニ知
事ヲオキ、郡・市・町・村
ニ長ヲオキテ、コレ
ヲ治メシム。知事・郡
長ハ、政府ヨリ命ズ
ルモノナレドモ、市

選 町村長ハ、市町村會ニテ、コレヲ選ブ。

市町村ニ、市町村會ヲ設ケ、府縣郡ニ、府縣
郡會ヲマウクルハ國ニ帝國議會ヲ設クル
ト、ホトシド、アヒ同ジ。

第二十四課 今ノ日本 (二)

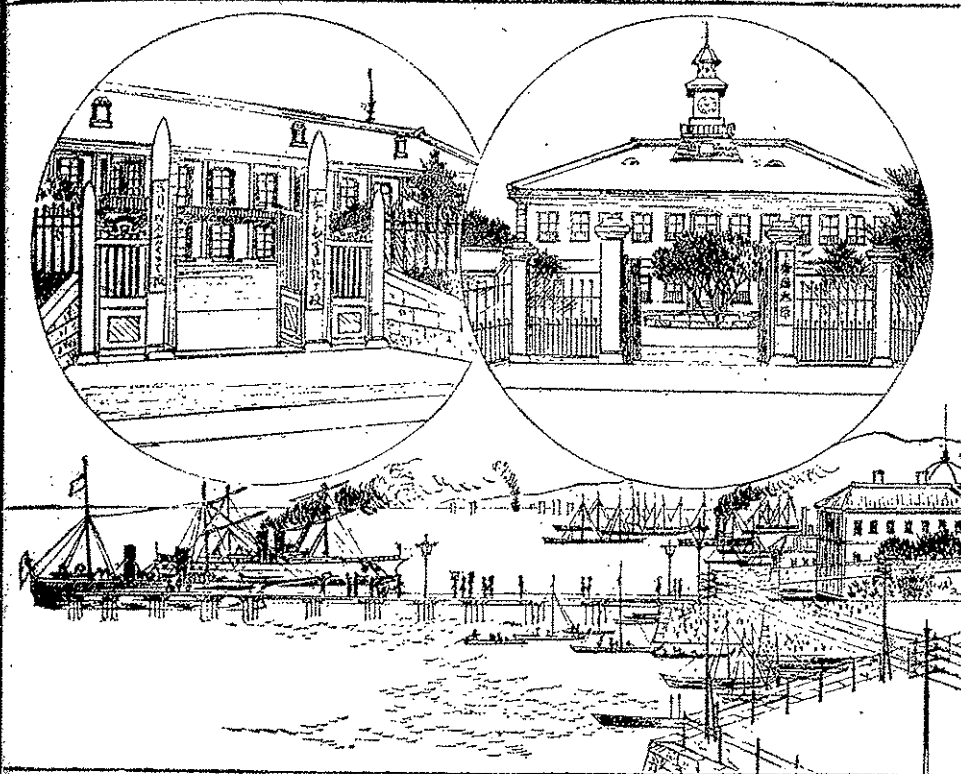
今ノ日本ハ、昔ノ日本ニアラズ。昔ノ日本
ハ、廣キ世界ヲ知ラヌ日本ナリシガ、今ノ日
本ハ、世界中ノ國々ト交リ、世界中ノ國々ト

產物ヲ交易シ、廣キ世界ニ國ノ光ヲカガヤ
カセル日本ナリ。

運 昔ノ日本ハ、人ノ往來ニモ、荷物ヲ運ブニ

モ、音信ヲ通ズルニモ、多クノ日數、多クノ金
ヲ費シタル日本ナリシガ、今ノ日本ハ、汽車、
汽船、電信、電話ナドアリテ、便利ヲキハムル
日本ナリ。

昔ノ日本ハ、學問センニモ、入ルベキ學校



ハ、ホトンド、ナカ
リシ日本ナリシ
が、今ノ日本ハ、小
學校、中學校、高等
女學校、高等學校、
帝國大學、ソノ他、
ソレゾレノ業ヲ
學ブベキ數多ノ

學校アル日本ナリ。

同ジク、日本ニ生レテモ、昔ノ日本ニ生レ
ズシテ、今ノ日本ニ生レタル我等ハ、昔ノ人
ヨリモ、幸多シトイフベシ。サレド、コノ幸ハ、
ミヅカラ得タルモノニアラズシテ、ミナ、
天皇陛下ノ御賜ナルコトヲ知ラザルベカ
ラズ。

れんしゅー 第十

市・町・村を治むる人は、市長・町長・村長なり。

市・町・村の費用を議するところは、市會・町會・村會なり。

府・縣・郡を治むる人は、知事・郡長なり。

府・縣の費用を議するところは、府會・縣會なり。

國を治め給ふ御方は、天皇陛下なり。

國の費用を議するところは、帝國議會なり。

盤

第二十五課

しよーぎの盤

しよーぎの盤のくみたてに、

誰

心をとめて誰も見よ。

金・銀・けい・ま・ひ・し・や・や・か・く、

き・よー・し・や・歩兵フツヒョウとそれぞれに、

役目定めておのが行く

みち一すぢの外は見ず。

前後左右にかけめぐり、

とりことなるもものとせず、

攻めうたるもかつりみず、

編纂 詩本 卷八 九十四 會社 音乃 令 鼎 形

保 守

一命すてはたらくも、
ひとりの王を守るため。
ひとつの盤を保つため。

T1A3
10
K0 973

を は り

明治三十四年六月廿五日印

同 年六月廿八日發

明治三十四年八月四日訂正再版印刷

同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本 尋常科

定 價		合 計	
甲種	卷一 八錢	卷五	十二錢
乙種	卷一 九錢	卷六	十三錢
卷二	十錢	卷七	十四錢
卷三	十一錢	卷八	十五錢
卷四	十二錢	卷九	十六錢
合 計		金 九 十 九 錢	

著 者 小 山 左 文 二

著 者 武 島 又 次 郎

發 行 者 兼 株 式 會 社 普 及 舍

代 表 者 右 社 長 山 田 禎 三 郎

東京市神田區南桑物町十番地

發 賣 所 帝 國 書 籍 株 式 會 社

明治三十四年八月十六日
文 部 省 檢 定 濟



